

シンボリック
ボボン

『家出で之』
歌ってみてさ...



都合のよい思い出

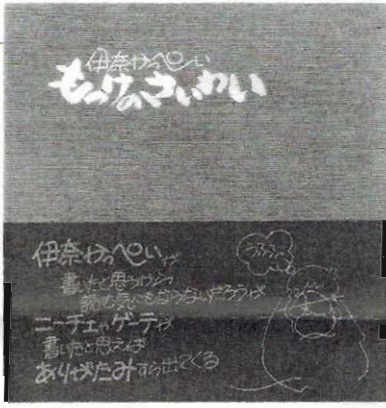
18

2014 5月号
(年に6回発行)

夏祭りと民謡
「江州音頭」と踊り



BOOKS



『もっけのさいわい』
伊奈かつぺい著

(おふいす・ぐう／本体1500円)

本誌にて「都合のよい思い出」を連載している伊奈かつぺいさんの新著が出た。連載では題字もイラストもご本人の筆によるものだから、その多才ぶりはよく分かつている。が、本書を見て(読んで、ではない)、そんな単純なものではないことに気づいた。

何しろ250ページ余り、全編手描き文字で埋められている。さらに、途中20ページほどのカラーページが挟まっていて、そこにはカラーイラストが満載されているのである。

ゆっくりと読みはじめ、じゅっくりと読み終えて、さて、本書をどう呼んだらいいのか悩んでしまった。順当なら「詩集」ということになるのだろう。これまで伊奈さんが口演してきた「方言詩」といえなくもない。たとえば、こんなふうだ。

《しゃべれば しゃべたて しゃべらえるし／しゃべねば しゃべねて しゃべらえるし／どせ しゃべらえるんだは／しゃべねで しゃべらえるしか／しゃべて しゃべらえるほが えて／しゃべてらて しゃべてけ》

これは「喋る」篇。

《しゃぶれば しゃぶたて しゃぶらえるし／しゃぶねば しゃぶねて しゃぶらえるし……》

と、こちらは「舐る」篇。

読んでいくうちに笑いがこみあげてくる。

または、こんなフレーズが並べられる。

《せまい長屋も楽しいわが家／坊や縁故を入社しな／ホテルの灯りまあどうだと行き／棟梁(かしら)の傷は一昨年の五月五日の出入りの日



……》

方言とは何の関係もない、地口による歌である。

文字でありながら、まるで著者が語り、歌うかのような錯覚に陥ってしまった。

つまりは、「詩集」というよりは「詞集」というべきなのかもしれない。

読み返していて「あ、そうか」と気づいた。文字を目で追っていて、どこからか声が聞こえてくる気がしたのは、手描き文字のおかげなのだ。これもまた著者の仕掛けたトリックだといえるだろう。